

<2004年02月>

「兵は凶器なり」

15年戦争と新聞メディア

- 1926 - 1935 -

爆弾三勇士の真実 = 軍国美談はこうして作られた！

前坂 俊之

(静岡県立大学国際関係学部教授)

満州事変から約4ヵ月後に、今度は上海事変(第一次)が起きる。中国側の激しい抗日運動、不敬事件のほか、日本人僧侶殺害事件などの紛争が相次ぎ、日中両軍が本格的に武力衝突した。

1932(昭和七)年1月8日、東京・桜田門付近で、朝鮮人が天皇の自動車に手榴弾を投げつけた、いわゆる桜田門事件が発生した。

この事件について、青島、上海、福州などで発行している中国国民党の機関紙『民国日報』は1月9日「日皇閱兵畢返京突遭狙撃 不幸僅炸副車凶手即被逮」(觀兵式より帰途中、突然狙撃されたが、不幸にもわずかに隨行車を爆破せるのみにて、兇漢は即時逮捕された)と書く不敬事件が起きた。(1)

それまでも日貨排斥や排日、抗日宣伝に反感を募らせていた日本側の憤激が爆発した。さらに、事件が続いた。

1月18日夜、上海で、日本人法華宗僧侶、信徒ら五人が中国人に襲われ、2人が死亡、3人が重傷を負うという日本人僧侶殺害事件が発生した。これに対して、翌20日、日本人居留民の青年が報復し抗日運動の拠点を襲い放火、日中双方に死傷者を出す三友実業社事件が起き、事件は一層エスカレート、上海事変へと発展していく。

1・上海事変も関東軍の謀略

これも戦後になって明らかにされたことだが、上海事変の発端も満州事変と同様、関東軍が仕掛けた謀略だった。日本人僧侶殺害事件は関東軍のワナで、中国人に金を与え、殺害させて、事件をデッチ上げたのである。これが発火点となって上海事変が勃発した。

当時、上海駐在武官補佐官・田中隆吉は、「秘められた昭和史」の「上海事変はこう

して起された」で謀略の真相をぶちまけている。(2)

それによると。

昭和6年10月初旬、関東軍の花谷少佐から至急来てほしいと電報が来たので、田中は出かけて、板垣大佐、花谷少佐に会った。

板垣大佐はこういった。

「日本政府が国際連盟を恐れて弱気なので、ことごとく関東軍の計画は邪魔される。関東軍はこの次にはハルピンを占領し、来年春には満州独立まで持って行くつもりだ。連盟がやかましく言い出すし、政府はやきもきして、計画がやりにくいから、この際一つ、上海で事を起こして列国の注意をそらせて欲しい。その間に独立までこぎつけたい」

関東軍は運動資金として2万円を田中に渡した。田中はこれだけでは足りないので、鐘紡上海出張所から10万円を借りた。田中は陰謀を練り、1月18日、日本人の僧侶が托鉢で回っているのを、買収した中国人の手で狙撃させた。この事件を待ち構えていた日本青年同志会員30余人が犯人が隠れていると主張して、ナイフと棍棒で、三友実業社を襲って放火し、帰路、警官隊と衝突して、死傷者を出した。

当時、こうした謀略は関東軍の当事者以外は知らなかった。上海事変は1月28日に始まった。

満州事変も含め、それまで相手にしてきた土着の軍閥は戦わず逃走するするばかりの軍隊だったが、第19路軍は全く違っていた。

激しい抗日意識に燃えており、敵をなめ切っていた日本軍は苦戦を強いられた。日本海軍陸戦隊の兵力は約2000人。

2・激しい中国軍の抵抗で日本軍は苦境！

中国の第十九路軍の予想外の激しい抵抗で日本軍は苦境に陥った。あわてた陸軍中央部は白川義則大将を司令官とする上海派遣軍を急遽、増援した。金沢の第九師団と久留米の第十二師団より編成した混成旅団の総兵力は約1万7000人にのぼった。

2月20日から25日まで、日本軍は上海市北郊の大場鎮、江湾鎮方面で第十九路

軍に総攻撃をかけた。しかし、市街地に塹壕を築き、鉄条網を幾重にも張りめぐらせ自動小銃で抵抗する第十九路軍の猛攻で、日本軍は死傷者が続出、大苦戦を強いられた。それは、以後ドロ沼の戦争が続く日中戦争の困難さを象徴した戦いであった。

3.1、「爆弾・肉弾三勇士」の出現

こうした背景の中で、「爆弾三勇士」は出現する。

三勇士の記事は1932(昭和七)年2月24日に一斉に掲載された。『大阪朝日』は第一面に四段で、「これぞ真の肉弾！ 壮烈無比の爆死、志願して爆弾を身につけ鉄条網を破壊した三勇士」と報じた。

各紙は「“帝国万歳”を叫んで我身は木端微塵、3工兵点火せる爆弾を抱き、鉄条網に躍りこむ」(『東京朝日』)「世界比ありやこの気魄、点火爆弾を抱き鉄条網を爆破す、廟行鎮攻撃の三勇士」(『東京日日』)「肉弾で鉄条網を撃破す、点火した爆弾を身につけ、躍進した三人の一等兵、忠烈まさに粉骨破身」(『大阪毎日』)



いずれの見出しも最大級の修飾語が並んでいるが、第一報(『大阪朝日』)にはこう報道された。

[上海特電23日発] 23日午後4時〇〇団司令部発表 = 22日〇〇団は独立で廟行鎮の敵陣地を突破し友軍の戦闘を有利に導いたが、その際、自己の身体に点火せる爆弾を結びつけ身をもって深さ4メートルにわたり鉄条網中に投げ、自己もろ共にこれを粉碎して、勇壮なる爆死を遂げ歩兵の突撃路をきり開いた三名の勇士がある。

廟行鎮の防御陣地には鉄条網を頑丈に張りめぐらし、塹壕深く後にひかえて、さすがのわが軍もその突破に悩んでいた際、わが〇兵隊の〇兵3名は鉄条網を破壊して敵陣の一角を突き崩すため自ら爆死して皇軍のため、御国のために報ずべく自ら死を志願し出たので、〇兵隊長もその悲壮なる忠心を涙ながらに『では国のため死んでくれ』と許したので右3人は今生の別れを隊長はじめ戦友らに告げ身体一杯に爆弾を捲付けて帝国万歳を叫びつつ飛出して行き、鉄条網に向って飛込んで真に壮烈なる戦死を遂げた。

これがため鉄条網は破れ、大きな穴が出来、敵の陣地の一部が放れ、これによってわが軍は、ここより敵陣に突入するを得、廟行鎮に攻め寄せてまんまとその翌朝陥れることが出来たもので、これを聞いた○団長、はじめ戦友らは涙を流して、その最後を弔った。満州事変以来第一の軍事美談とし聞くものをして感泣せしめている。」

この記事は爆発的な反響を呼んだ。国民がいかに熱狂したかは、この第一報へのすさまじい反響にあらわれた。

4・「まさしく『軍神』 忠烈な肉弾三勇士に、国民は感激の渦

「まさしく『軍神』 忠烈な肉弾三勇士、『天皇陛下の上間に達したい』陸軍省では最高の恩賞」 「他の戦死と違い肉弾によって皇軍の士気を鼓舞した三勇士の比類稀れな戦意を称揚するため、陸軍省恩賞課では許されたる範囲内に誇る最高の恩賞、勲六等と金塊勲章の恩命に浴せしむるほか、天皇陛下の上間に達したいと考慮中であるが、陸軍省では、往年の広瀬、橘両中佐の行為にもまさる軍事美談として教科書にその勇名を謳歌し三勇士の霊を慰めたいと考慮中である」(『大阪朝日』昭和7年2月25日)

「誉れの三勇士、銅像、伝記の編纂、師団葬、国民をあげて感激の渦」 「肉弾三勇士の悲壮な戦死は果然猛烈な国民的反響を捲起し、24日夕刻まで僅か一日の間に、三勇士の遺族宛の
じゅつぺい
恤 兵金としては陸軍はじまって以来の巨額だけに、当局もすっかり面喰い、かつ感激している。大隊では宮内に三勇士の銅像、または記念碑を立て伝記を編纂して一般に配布するものと見られている」



荒木陸相は語った。

「かくのごとき壮烈悲壮言語に絶した行為はひとり日本軍人のみがなし遂げられることであって外国では到底見られない事柄で、全軍の士気に影響するところ甚大である。何れ公報が達した上で、これに対する遺憾なき措置を研究しようと思う」(『大阪朝日』同25日)

報道された翌日にはすでに最高の恩賞である勲六等金鵄勲章や教科書への記載、銅像の建設、記念碑建立、伝記の編纂を検討するなど考えつくあらゆるものを動員して、誉めたたえた。

その素早さには驚くが、それだけ感動が大きかった証拠である。国民の熱狂ぶりは陸軍始まって以来という甲慰金のケタはずれの額に象徴されていた。

「三勇士の勇敢無比な行動は全国民を感激せしめたが、24日朝早くもこれに対し大阪住吉区住吉町、宗像半之助氏が1000円を甲慰金として本社に寄託し、次いで西宮市名次町、富和停氏も300円を寄託したほか多数の甲慰金寄託者があった」（『大阪朝日』同25日）こうして、当局の感動が国民の熱狂を呼び、これを受けて、さらに当局がいっそうの榮譽を与えるという相互の増幅作用がエスカレートする。ついさっきまで、全く無名の兵士がまたたく間に“軍神”に祭り上げられた。

三勇士の行動の詳細な分析よりも、その結果としての死がシンボリックに顕彰されたのである。

この軍神化、国民と当局の熱狂の媒介役は新聞であった。『朝日』『毎日』は単に報道に徹するという“黒子”の役から一歩踏み出し、国民を指導する役割を強力に発揮した。軍部の予期する以上に、国民に排外思想とその反動としての国粹主義を鼓舞した。

いかに軍事美談が作られていったか。その過程をみてみよう。『朝日』『毎日』の三勇士のキャンペーンは三つの方法を密接にからませながら行われた。これほど成功したキャンペーン、“軍神の誕生”の例はないと思われるほど、見事に成功した。

5.1 「マスコミが軍国美談を作る」

「マスコミが事件を作る」という典型がここに現れている。



記事としての報道。一つの事実を拡大して、軍事美談、軍神化して大々的に報

道する。これに対する反響も最大もたさず、一定の目的を持って、国民に深い感動を与えたと自らの報道を増幅、情報のキャッチボールを行う。

社説や論評で、讃美し、滅私奉公、大和魂として折り紙をつけ、国民を指導、教育する。

新聞社自ら率先して遺族へ弔慰金を贈り、広く国民から弔慰金を募る。遺族を新聞社が招待して慰める。さらには、三勇士の歌を作って、軍部や国に代わって散華の精神を鼓舞する。

『朝日』『毎日』の大新聞のその圧倒的な影響力で画一化された情報が、国民を一つの大きな流れに巻き込んでいった。

軍部の目論見以上に、一人一人の国民に散華の精神、国家に生命を捧げる特攻精神の美しさを強制していった。

しかし、こうした熱狂的な反響の裏に隠された軍部の電光石火の宣伝も見逃せない。満州事変を謀略によって引き起こした関東軍は1931(昭和六)年10月19日に「満州事変に関する宣伝計画」という極秘文書を作成した。

その方針は「皇軍ノ正義人道主義ヲ高唱宣伝ス。情況ニヨリ政府牽制又ハ鞭達ノ意味ヲ以テ、与論ヲ喚起シ或ハ、空気ヲ醸成スルニ努ム。謀略ニ伴フ宣伝ハ隨時主任者ト協定ス」とあり、宣伝要目のなかには「日本軍ノ実力ト人道主義並ニ将卒ノ善行美談」という項目がある。三勇士はまさしくこれに該当した。

また宣伝手段には「新聞通信員並ニ雑誌記者ハ会同或ハ個人的接触ニヨリ材料ヲ供給シ、或ハ所要ノ理解ヲ得シム。新聞材料並ニ雑誌材料トナルヘキ有利ナル写真ハ、軍部モ之力撮影ニ努メ所要ニ応シ隨時配布ス」となっていた。(3)

三勇士が報道されて3日後の27日に『大阪朝日』は社説に取り上げた。「日本精神の極致 三勇士の忠烈」と題して、その行為を絶賛した。

軍神というヒロイズム、大和魂、日本精神の権化、などの讃辞のパレードで、その興奮の底にある戦争熱はヒートアップした。

「鉄条網破壊の作業に従事したる決死隊の大胆不敵なる働きは日露戦争当時の旅順閉塞隊のそれに比べても、勝るとも決して劣るものでなく、3工兵が……鉄条網もろとも全身を微塵に粉碎して戦死を遂げ、軍人の本分を完うしたるに至っては、真に生

きながらの軍神、大和魂の権化、鬼神として感動せしめ^{だふ}懦夫をして起たしむる超人的行動といわなければならぬ。

内憂にせよ、外患にせよ、国家の重大なる危機に臨んで、これに堪え、これを切り開いてゆく欠くべからざる最高の道徳的要素は訓練された勇氣である。

訓練された勇氣が充実振作されてはじめて、上に指導するものと、下に追隨するものが同心一体となって、協同的活動の威力を發揮し、挙国一致、義勇奉公の実をあぐることが出来るのである。

この点にかけても、わが大和民族は選民とっていいほどに、他のいかなる民族よりも優れたる特質を具備している。

それは皇室と国民との関係に現れ、軍隊の指揮者と部下との間に現れ、国初以来の光輝ある国史は、一にこれを動力として進展して来たのである。肉弾三勇士の壮烈なる行動も、実にこの神ながらの民族精神の発露によるはいうまでもない。

『大阪毎日』では26日第一面の「日々だより」のコラムで徳富蘇峰が「廟行鎮攻撃の三勇士」として絶讃した。

「死に臨んで従容自若、天皇陛下万歳、日本帝国万歳を絶叫して瞑目したる英雄的行動は言わずもがな。すなわち3工兵の如き、自ら進んで死地に就き、皇軍の為に、其の進行を開拓するを以て、兵士の本分を尽くすものと心得たるに至りては、我等に如何なる言葉を以てしても、之を讚美し尽くすことが出来ない」

6・朝日・毎日は軍神のイベント・事業化

こうして、三勇士は“軍神”というお墨付きが出た。あとは顕彰である。『朝日』『毎日』は一歩でも先じようと猛烈な競争で、軍神の事業化に乗り出した。

ここでは、『毎日』が一步リードした。三勇士の報道では、その内容、詳細さ、迅速さにおいて『朝日』が先じた。『朝日』が「肉弾三勇士」として報じれば、『毎日』は「爆弾三勇士」とそれぞれの名称で、報道、イベント合戦をくり広げた。

この報道合戦でやや遅れをとった『毎日』は、事業の面では終始、『朝日』を圧倒した。

2日後の26日には、早々と『大阪毎日』『東京日日』両社は「爆弾三勇士の遺族へ各千円、計三千円を弔慰金」として贈った。

その理由は「正に今次、事変中の王座を占めんとするの概あり、本社において永久に輝くべき三勇士のかくたる功勲に深甚なる敬意を表し、英霊を慰むるところあらんと欲す」としている。

これに対して、植田団長や司令部は感激し、士気振興のため全軍へ報告した。

「大阪毎日新聞がいつも国家的立場から、物事に善処していることはわれらの常に感服しているところです。

3勇士の壮烈な最後について大阪毎日が深甚なる同情を表し、かつまた全国の士風振興のために義損金を募集し遺族を慰められると聞いて地下の3勇士も、さぞ喜んでいでしょう。わが軍人精神の花です。御社の義挙に対しわれらは軍部を代表して感謝します」(2月26日)

『大阪朝日』も負けてはいなかった。

「誉れの肉弾三勇士肖像と戦記、無代頒布する」との社告を27日朝刊第一面にデカデカ掲げた。

3勇士の肖像を額面用として、グラビア高級印刷にして、これを、3勇士の勇敢なる行動、履歴などを詳述した戦記と合わせて配布しようというもの。

配布先は関西以西の各小学校、青年団、少年団、在郷軍人会に限り、一カ所5部まで、2万カ所10万部をすべて無料で配った。

7・三勇士大フィーバー

一方、3勇士讃美の一色に塗りつぶされ紙面の横に毎日のように、読者から送られてくる「3勇士弔慰金」の金額、寄託者の名前がかなりのスペースを割いて掲載されている。

国民の熱狂的な感激は弔慰金の殺到ぶりと比例した。28日には『朝日』への弔慰金は1万8422円、3月8日には3万4549円を突破、『大阪毎日』も3月12日には3万575円に達するなど陸軍始まって以来の記録的な額に達した。当時は、標準家庭(4人)の1ヶ月の収入が82円という時代で、現在の金に換算すると1000円が約500万円に当たり、いかに巨額かがわかる。

連日、3勇士のその後の詳報や国民の熱狂ぶりがセンセーショナルに報道された。映画では、各社が競って「肉弾三勇士」の撮影を開始。東活が「忠烈 三勇士」、新

興キネマが「肉弾三勇士」、日活も、松竹キネマも負けずと準備に入った。

京都南座の鴈治郎一座、大阪道頓堀の浪花座では早川雪洲一座、中座では曾我廼家五郎ら、ついには文楽にも「肉弾三勇士」が一斉に登場するなど、まさに“肉弾三勇士時代”を迎えた。

三勇士フィーバーはこれだけにとどまらなかった。“三勇士まげ”という女性の髪や、お菓子にも爆弾チョコレート、肉弾キャラメル、三勇士せんべい、京都の友禅の模様まで、日の丸、軍艦、飛行機の入った勇ましいものまであらわれた。

三勇士の爆発的なブームに便乗した新聞は次は事業化に乗り出した。

三勇士はすでに軍神になり、この世にはいない。そこで目がつけられたのは軍神の遺族であった。『毎日』は三勇士の遺族を、慰安するために関西、東京に招待することを三月八日に発表した。

遺族に興行価値があるというわけだ。京都、東京、大阪の順で回ったが、明治神宮や靖国神社、陸軍省、新聞社などの訪問のほか、夜は南座、歌舞伎座、浪花座などで三勇士劇を次々に観劇するスケジュールが組まれていた。

わが子や兄弟が軍神となり、芝居で演じられるのを見ている姿を、これまた連日のように感激調で書きまくった。

こうした三勇士讃美のキャンペーンのハイライトは「三勇士の歌」であった。2月28日に『朝日』『毎日』は同時に懸賞募集を行うと第1面に社告を出した。『朝日』は「肉弾三勇士の歌」、『毎日』は「爆弾三勇士の歌」である、賞金はいずれも一等500円であった。『報知』『国民』も懸賞募集した。

『朝日』が「世界歴史上に類い稀なる三勇士の悲壮なる殉国の精神を一層深く国民に印象せしめ、かつこれを永久に記念するため」と銘打てば、『毎日』は「本社はこの忠烈な犠牲的行動を永く後世に伝えるべく広く募集する」と述べて、競争になった。

『毎日』は二十九日の社会面で「爆弾三勇士の歌」募集に対して、応募が続々あるという反響を七段抜きの記事にして、あ



おった。

「轟く武名、輝く偉勲、『爆弾三勇士』絶讃の声は天下に充ちわたった……。いかに三勇士の壮烈を極めた最期が一般民衆の血を沸き立たしめているか痛感せしめられている……」とし、荒木貞夫陸相、鳩山一郎文相、薄田泣菫の言葉を並べている。

鳴物入りで募集された三勇士の歌は3月15日に『朝日』『毎日』とも一斉に入選作が発表された。

『朝日』の「肉弾三勇士の歌」には何と、12万4561通という空前の応募があった。

8・・与謝野寛こと鉄幹「鉄幹、血迷う」「爆弾三勇士の歌」

一方、『毎日』の「爆弾三勇士の歌」にも、総数8万4177編の応募があり、この中から、詩壇の大家、与謝野寛の作品が選ばれ、読者を驚かせた。

与謝野寛こと鉄幹はいうまでもなく、与謝野晶子の夫である。日露戦争時に「君死に給ふこと勿れ……」とうたった晶子の夫が何と爆弾三勇士に感激、一般の読者に混じってこっそり応募したのが当選したわけだ。

「鉄幹、血迷う」と一部から大きな批判が寄せられた。この鉄幹入賞の裏には「一般募集とは口実で、最初から鉄幹に作詞を依頼しておき、規定の倍額の謝礼を出すという条件で入賞させた」という説も流された。

鉄幹は当選歌を発表後、軍部の横やりで、(三)の「答えて『ハイ』と工兵の」の文句が「これでは上官が命令したことになり、事実と相違する」と指摘され、鉄幹は修正したといわれる。

「肉弾三勇士の歌」

- (一) 戦友の屍を越えて、突撃す
祖国のために
大君にささげしいのち
ああ、忠烈、肉弾三勇士
- (二) 廟行鎮鉄条網を、爆破せん
男児の意気ぞ、身に負へる
任務は重し
ああ、壮烈、肉弾三勇士
日爆薬筒担ひて死地に躍進す
敵壘近し
轟然と大地ゆらぐ

ああ、勇猛、肉弾三勇士

「爆弾三勇士の歌」

- (一) 廟行鏡の敵の陣
我れの友隊すでに攻む
折から凍る二月の
二十二日の午前五時
- (二) 命令下る、正面に
開け、歩兵の突撃路
装置の間なし、点火して
破壊筒をば抱き行け
- (三) 答へて「はい」と工兵の
作江、北川、江下ら
凍たる心三人が
思ふことこそ一つなれ
- (四) 我等が上に戴くは
天皇陛下の大御稜威
後ろに負ふは国民の
意志に代れる重き任

「肉弾三勇士の歌」は山田耕筰が作曲を行い、新時代の軍歌調にした。山田はこの曲を「三勇士の忠烈に対する讃歌であり、またその忠烈を弔う挽歌であり、同時にまた愛国的行進曲でもある」と語った。

一方、「爆弾三勇士の歌」は陸軍戸山学校軍楽隊、辻順治隊長らが作曲した。辻隊長は作曲のネライを「三勇士は戦死する気で戦死したのですから、ことさらに曲は哀れっぽく作らず悲愴な中にも勇壮味の失せぬ軍歌とし、兵士たちも一般国民も歌うに、ふさわしい新鮮味があるものを心掛けて作りました」と語った。

『毎日』の「爆弾三勇士の歌」は17日夜、大阪中央公会堂で発表演奏会が開かれた。この発表に先立って、『大阪毎日』本社前から、正午にスタートし、大阪駅前、阪急前、天満橋、大阪城内師団司令部などを戸山学校軍楽隊がパレードするにぎやかさ。

会場の中央公会堂は約6000人が殺到し、超満員で、入り切れず帰った人も多か

った。

『朝日』の「肉弾三勇士の歌」も印刷された楽譜が各学校、官庁、青年団から注文が殺到し全国的に熱唱されたという。こうした嵐のような三勇士ブームは約2ヶ月間ほど続く。

ついには、4月11日、大阪で出征志願が果たせなかった24歳の工員が飛びおり自殺をはかったり、岐阜県加茂郡のため池に三勇士を慕う純情な乙女が入水自殺するなどの悲喜劇が波紋を広げた。

ところで、新聞が絶讚し、国民が熱狂した三勇士の報道は事実だったのか　そこが問題である。事実ならば、国威発揚の状況下ではたしかにその行為は英雄的であり、讚美するのも当たり前であろう。

9・・・「新聞が捏造した爆弾三勇士」

爆弾三勇士の取材の内幕について『真相・特集版(第十集)』(昭和24年8月)「新聞が捏造した爆弾三勇士」と題し当時の上海特派員の話に掲載している。

「東朝、東日をはじめ内外の新聞記者団は、それぞれ特派員を送り込み、必死の取材活動に当たっていた。しかし、陸軍方面は戦線が錯綜して師団司令部にも適確な情報が入らない。二月二十二日夜、虹口の日本人クラブで飯を食べていた当時、前線から帰った将校の口から『今朝、廟行鎮攻撃で三人の工兵が爆弾を抱いて鉄条網に飛び込み、突撃路を作った』という話を聞いた。

廟行鎮といえば、戦線の最右翼で、上海から簡単に実状調査になど行けるものではない。東朝も東日も、ただ『爆弾を抱いて自爆した』と類例のない凄惨な死の方に興奮してしまい、23日とにかく第一報を東京本社に送った。

これを見た東京本社側でも、事あれかしと待っていただけに、この陸軍部隊最初のビッグニュースに文句なしに飛びつき、紙面ヘデカデカと載せる一方、現地支局へ『ただちに詳細を送れ』と矢継早に電報を送った。

東朝では、第九師団について、金沢支局から来た特派員、写真部員が24日に自動車で廟行鎮へ向った。東日では特派員が二人、一日遅れで25日に現地に向った。何しろ戦線が入り乱れ、至るところ流弾が飛び、廟行鎮へ行くには1キロほど手前で、自動車を捨て、あとはほふくして進まねばならなかった。

真先に廟行鎮にたどりついた東朝の小湊記者らはさらに北方1キロ余の麦家屯で

休止中の松下工兵隊を尋ね当てたが、そこで次のような話を聞いた。

『少し大げさに騒ぎ過ぎるのではないか。特に、あの三人だけを三勇士に祭り上げられては困る。工兵隊の任務として、こんな危険はあり勝ちのことだし、3人だけが特別に自分たちで自爆の決意をしたのではない。』

小隊長が強行破壊を命令し、それにもとづいて、伍長が部下の第一組に事前に点火して持って行き、鉄条網の下へ突っ込んでくるよう命令したのだ。この弾丸雨飛の下で行動するのだから、35人の決死隊は全部同じように死を覚悟しているし、三人のほかに、この任務で4人が戦死している。その勇敢さからいえば、35勇士とすべきだ。もし点火して持って行ったのが偉いのだったら、他の一等兵ら三人も加えて六勇士とすべきだ』

『三勇士のうち江下は塹壕内まで吹き飛ばされ、虫の息だったが、戦友に抱かれて死んだ。北川は身体が真二つにされ土の上に坐った』と全員、木端微塵説も打ち消された。おかげで、現地特派員たちは最初の興奮が消えてしまった。

しかし、東京本社はいずれも軍神の最後にふさわしい華々しい戦死の状況を要求してくる。すでに第二報で国民を感激させ、陸軍も面子が立ったと喜んでいる時に、いまさら、日本軍隊の絶対服従の精神に従って、命令のまま死地に赴いただけの話で、日本軍隊にはありがちのこととも書けない』

10・本当は日本軍隊の絶対服従の精神で死地に赴いただけ

オーバーに書かれた記事が一度紙面化されると一人歩きする。記事そのものの真びょう性を確認する間もなく、キャンペーンの矢継ぎ早のスピードが客観的であるべき記事を神話にしてしまったのである。

虚偽の事実を軍部はもちろん知ってはいるが、関東軍の世論の宣伝工作にもあったとおり利用して、一つの目標に向けていく。新聞もその企業のメリットから事実には目をふさいでセンセーショナルに報道する。

新聞の本分を忘れたこうした極端な排外主義、熱烈な殉国精神、大和魂の高揚は、軍国主義への大きなうねりとなり、数年後には自らの首をしめる結果となった。時流に便乗し国民をあおったセンセーショナリズムのツケの大きさに新聞人は気づかなかったのである。

国立公文書館に、1933(昭和八)年10月に内務省警保局保安課が作成した「爆弾三勇士のほんとうのこと」というわずか2頁ほどの秘密文書が保存されている。

同じ工作隊に属する一兵卒の証言を綴った文書である。

「鉄条網まで33メートルの距離がある所を破壊地点にきめて作業にかかったが、何分敵が近いので、他の班も失敗した。そこで破壊筒を鉄条網につき込んで導火線に火をつけるようなグズグズしたことは、うまくいかないの、こっちから導火線に火をつけて行くことにしたそうです。

軍隊の導火線は完全なので途中で火が消えるようなことはないから、長くてもよいのだが、33センチばかり短く切ったそうです。……急いで走って入ってスバヤク帰ってくる予定だったそうです。

ところが、3人が出かけて15メートルも行ったところ、つまりいたか、弾丸にあたったかして、一人が倒れ、それで三人が皆倒れたそうです。

(中略)三人のものは、そのまま逃げて帰りかけたら、Aが『なんだ、天皇のためだ、国の為だ行け』と大声でどなりつけたので、三人は引き返して破壊筒をかかへて、進んで鉄条網へ着いたか、着かないのに爆発したのだそうです。

三人はAに殺されたようなものです。戦争に行かない人にはわかりませんが、命令に背いたとか、命令を受けて少しグズグズしていたとかで銃殺された例はたくさんあります。三人もそれを知っていたので、同じ死ぬならと思って、引返して進んだのでしょう。可哀相でなりません」

もし、これが事実なら軍神に祭り上げられた三兵士こそ災難であろう。

11…メディアが玉砕、特攻の散華をでっち上げた

新聞が予期せぬ以上に三勇士は圧倒的な熱狂を国民に与えた。三勇士の一連の報道キャンペーンで『朝日』『毎日』を中心にした新聞の果たした役割をふり返してみると、次の2点に集約できる。

第一は苦戦を強いられた上海事変の敗北から国民の目をそらせてしまった。日中戦争の困難さを象徴した上海事変の実態が三勇士の出現で国民の目から隠

されてしまい、排外主義をいっそう、昂じさせた。

第二は近代化する戦争の中で、相変わらず一昔前の肉弾散華の精神に絶対的な価値が置かれてしまった。爆薬や兵器の不備も肉弾や大和魂の発揮によっておぎなえるというアナクロニズムがますます台頭する。太平洋戦争になって追いつめられると、玉砕、特攻の散華をくり返すのがこの三勇士のヒロイズム鼓舞の延長線上にあった。

極端な排外主義、その反動としての熱烈な殉国精神、大和魂の高揚がファシズムへの完成に大きな役割を果たしたが、三勇士はその発端になったのである。

つづく

< 引用資料・参考文献注記 >

- (1) 『出版警察報 41号』 1932年2月号
- (2) 『別冊 知性』 1958年12月号
- (3) 『資料 日本現代史 8 - 満州事変と国民動員』 功刀俊洋・藤原彰編 大月書店 1983年10月 211 - 213P

<http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/~maesaka/maesaka.html>